

長源寺と釈迦涅槃図

◆長源寺地藏堂

御前山地域の西端に位置する野田地区。字綱川にあるお堂が長源寺地藏堂です。寺に伝わる書付

によれば創建は天正元年（一五七二）、當時は「三王山医王院長源寺」と称したとされます。ですが、水戸藩が領内の寺院の台帳「開基帳」をまとめた寛文三年（一六六三）の段階で

は、長源寺は「皆本山長玄寺」と表記され、浄土宗で瓜連の常福寺の末寺だったと記されています。

水戸藩成立以前の慶長七年（一六一〇）に家康の命によって行われた、いわゆる備前検地では、長源寺は「見捨」（見捨地）とされ年貢が免除されていました。檀家は三十五軒という小さな寺でした。



▲長源寺地藏堂

地藏堂に安置される子安地藏は古くから安産・子育てを願う女性の信仰を集めてきました。地藏の左手には出産をひかえた女性が腹に巻いて安産を願ったという紅白のタスキが何本も掛けられています。

◆寺宝「釈迦涅槃図」

長源寺には江戸時代中ごろの制作



▲紙本着色釈迦涅槃図

国宝として有名な高野山金剛峯寺の日本最古の涅槃図は、平安時代後期の応徳三年（一〇八六）の銘があり、およそ270cm四方の大きさです。涅槃図が入っていた箱の表書に「涅槃絵像什物 長源寺 體登代、箱裏に「念仏講惣巨中延享四丁卯四月造立」と墨書があります。「造立」が箱の制作を指すのか、絵自体の制作

これだけの大きさの絵を、小さな寺院が持つに至った経緯はなんだっただけでしょうか。おそらく檀家が資金を出し合い、更に一般の人々にも勧進（寄付）を募ったかもしれません。それほどまでに涅槃図を重要視していたのでしょう。

その思いは今に受け継がれ、長源寺地藏堂では現在も毎年八月二十三日に子安地藏の開帳を兼ねた涅槃図が行われています。野田の四つの地区が回り番で会の準備・片付けの担当となり、当日は朝から地藏堂の周りや堂内を清掃し、涅槃図を掛け、子安地藏の厨子を開帳して参拝の人々を待ちます。線香を手向けお参りし、持ち寄っただんごやお酒などを振る舞い、一日中、地元の人々や子どもたちの参拝が続くそうです。無住になった寺院に伝わる行事を地区の檀家だけで行っている大変珍しい事例といえます。

地藏堂の役員の方々との協議により境内を整備し、近年、裏山に埋もれてわからなくなっていた江戸時代初期以来の歴代住職の墓や新瀉や水戸など他所の人の墓を掘り起こして並べ直すなど、地元の方々の思いによって今も地藏堂は地域のよりどころとなっています。

※滝田次男さんに聞き取り調査にご協力いただきました。

と思われる「釈迦涅槃図」という絵画が伝わります。「涅槃図」とは釈迦が臨終を迎える場面を描いた絵画で、釈迦を尊びしのぶ「涅槃会」が行われる際にその場に飾られるものです。そのため多くは掛軸として作られています。大判のものが多いため特徴で、長源寺の涅槃図も縦219cm、横145cmあまりあります。

を指すのか不明ですが、少なくとも絵は箱と同時代かそれより早く作られていたと考えられます。絵では北枕に横たわる釈迦の周囲に集まった弟子や諸仏、動物や昆虫たちがその死を嘆き悲しむ様子が極彩色で描かれています。画面の右上からは釈迦の母親の摩耶夫人が天上から駆け付けています。

歴史民俗資料館大宮館

☎52-11450